

公益財団法人朝日新聞文化財団 2018 年度事業計画

(はじめに)

2018 年度政府経済見通しは、実質 1.8% (名目 2.5%) の GDP 成長率を見込むものの、年明け以降、世界経済は金融市場が混乱するなど不透明な状況が続いている。

財団の助成事業を賄う基本財産の運用収入は、国内の低金利が長引く中で預金の利息収入は低調が続き、株式配当も大幅な増加は見込みにくい状況にある。大阪国際フェスティバルは、2013 年のフェスティバルホールのリニューアルに伴う再開後、地域に定着しつつあるが、地元経済の回復が遅れる中、引き続き協賛金集めや集客努力が必要になっている。

(事業計画の柱)

- ① より地域に根ざした大阪国際フェスティバルを目指す。17 年 7 月バーンスタイン『ミサ』公演は、総監督・井上道義氏が大阪府・市主催の大阪文化賞を、また、演奏および舞台成果が関西・大阪 21 世紀協会主催の大阪文化祭賞をそれぞれ受賞し、高い評価を受けた。当年度も地域音楽団体との協働を深め、持続可能な事業としての基盤強化を目指す。
- ② WE B による助成受付やフェイスブック (FB) による助成・音楽事業の広報・コミュニケーション活動を強化し、公益性の観点を保持しつつ、効率的な財団運営に努める。
- ③ 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会はスポーツの祭典であるとともに、国をあげてわが国の文化芸術の価値を世界に発信する機会となることから、当財団の音楽公演および芸術活動助成などの事業においても、こうした点を意識し、2019~20 年度に向けた準備を進める。

(主な事業内容)

1. 音楽会、美術展覧会等の事業に対する助成 (定款第 4 条 1)

音楽祭、美術展覧会の開催等の芸術活動に対し助成する。18 年度実施事業の申請受付は 17 年 11 月 28 日に締め切り、18 年 2 月 14 日 (音楽分野) と 2 月 21 日 (美術分野) に芸術活動助成選考委員会を開催。昨年は過去最高水準の応募総数 363 件だったが、今年は 301 件にとどまり、その中から 165 件に合計 2500 万円の助成を決めた。

15 年度から WE B システムに一本化した受付事務については、電子申請システムの改良を重ね、選考の質的向上と効率化につながっている。助成対象事業の情報発信や助成先とのコミュニケーション強化のため FB 活用と訪問活動をより一層高める。

2. 文化財の保護等のための事業・活動に対する助成（定款第4条2）

2018年度の実施事業は17年6月中（WEBは7月5日まで）に申請を受け付け、9月の文化財保護助成選考委員会で38件の申請の中から継続複数年事業を含め29件、合計5000万円の助成を決定した。被災地支援枠は特別設けてはいないが東日本大震災と熊本地震関連事業に対し2件869万円を助成する。また、文化財保護や修復・公開の重要性を啓蒙普及するシンポジウム等のイベントの朝日新聞社との協力開催も継続する。これらを含めた18年度の事業予算は5435万円とした。今年度も助成申請はWEBと書類との並行受け付けを継続し、FBや直接訪問を含めた助成事業のフォローアップ活動を充実させていく。

3. 文化・学術等の向上に寄与した者に対する顕彰（定款第4条3）

芸術家、研究者等に対する顕彰を目的として朝日賞を贈呈する。近年の業績を主な対象に幅広く候補者を調査し、例年12月初めに開く朝日賞選考委員会で若干名選定する。

4. 音楽会等の公演の主催（定款第4条4）

第56回となる大阪国際フェスティバルは、4月21日『大阪4大オーケストラの響演』で開幕する。今回初めて尾高忠明が大阪フィルを振る。5月12日『オペラ チェネレントラ』はシンデレラのオペラ版。イタリアで活躍している脇園彩を主演に、ロッシーニの権威、故アルベルト・ゼッダ氏の薫陶を受けた指揮者・園田隆一朗が日本センチュリー、藤原歌劇団とタッグを組む。9月23日『サイモン・ラトル指揮 ロンドン交響楽団』はバーンスタイン交響曲第2番「不安の時代」（ピアノ：クリスティアン・ツィメルマン）とマーラーの交響曲第9番。11月29日『ワレリー・ゲルギエフ指揮、ミュンヘンフィルハーモニー管弦楽団』はブラームスのピアノ協奏曲第2番（ピアノ：ユジャ・ワン）とブルックナーの交響曲第9番。『チェネレントラ』では昨年につき大阪芸術大学の協力を得てポスターを制作、『大阪4オケ』では大阪府と共同で府民を招待するなど、地域を巻き込んだ展開を続ける。

以上